

ステロイドで免疫を抑えると、様々な副作用が起こるのですが、ステロイドをやめたとしても、やめた途端に免疫が回復し始め、すぐにあらゆる細胞に侵入して増殖した様々なヘルペスとの戦いが始まります。とりわけ神経の細胞にいるヘルペスとの戦いは、自覚できます。言い換えると、体性神経である運動神経の細胞で戦うと、動きにくい、知覚神経の細胞で戦うと、痛くなる、痺れる、感覚がなくなる、味や匂いがわからなくなる、耳鳴りがする、聞こえにくくなる、目が見えにくくなる、などの症状が出てきます。一方、自律神経である交感神経や副交感神経で免疫とヘルペスの戦いが開始され、炎症が起きると、あらゆる種類の神経症状が出現します。つまりヘルペス性神経炎により、神経が刺激されると、その刺激が電気信号に変わり、信号が脳に伝わり、様々な症状として自覚されるのです。

痛みの原因として一番多いのはヘルペス性の神経炎ですが、どんな痛みの本を読んでも一行も触れられていません。さらに世界中の医者は、自律神経でヘルペス性の炎症が生じて症状が出て、外から神経にいるヘルペスと免疫の戦いが見えないものですから、ヘルペスが原因であるとは決して口には出さず、適当に自律神経失調症という病名をつけるだけで事足りりとしているのです。

さらに全身の知覚神経（痛覚神経）でヘルペスと免疫が戦うときには、痛みで動くことさえもできなったりするのですが、これを原因不明の線維筋痛症という病名をつけるだけで、その原因については解明しようとしません。

ここで、交感神経と副交感神経の働きと、交感神経や副交感神経でヘルペスと戦うと、つまりヘルペス性の炎症がそれぞれの神経で生ずると、どんな症状が出るのかについて説明しましょう。

ご存知のように、自律神経とは、作用が相反する2つの神経、すなわち交感神経と副交感神経に分類されます。脳や脊髄には自律神経の中枢があり、それぞれ全身の末梢神経に自律神経線維を送っています。自分の意思でコントロールすることはできません。

交感神経の役割は、闘争、逃走、緊張の神経で、昼の活動時に優位になるので昼の神経とも呼ばれます。副交感神経の役割は回復、休息で、夜の睡眠時に優位になるので夜の神経とも呼ばれます。

ヘルペス性交感神経炎の症状としては、常に怒ったり、興奮したり、落ち着きのない状態。従って夜も不眠症になりやすくなります。ヘルペス性副交感神経炎の症状としては、常に眠たい、しんどい、疲れやすい症状がみられます。

以上について、組織、機能別に一覧表にしましたので、ご覧ください。

	交感神経	ヘルペス性交感神経炎の症状	副交感神経	ヘルペス性副交感神経炎の症状
睡眠	覚醒	不眠症になります。	安眠	嗜眠症になります。
血流	運動に必要な大	交感神経は活動の神経	休息時には筋肉	血液は主に活動時は

	きな筋群に血が集中します。	ですから、血流を全身に運ぶために血管を収縮させ、血圧を上げます。特に筋肉にいく血流を増やします。	には血流は必要ないので、内臓や末梢に集まります。	筋肉に流れ込むようになるため、内臓への栄養や酸素の供給が減ります。全身の良好な血行を保つためには自律神経のバランスが大切なのはすべての臓器についても言えます。
瞳孔	拡大	交感神経によって瞳孔散大筋は支配され、瞳孔が散大します。瞳孔の大きさ（瞳孔径）は両眼同等にコントロールされていますが、ヘルペス性の交感神経の障害が片方に起こると瞳孔散大筋の麻痺をきたし、片目の瞳孔が縮小します。瞳孔が円形でないとか、左右の瞳孔の大きさが違う（瞳孔不同）とか、光が当たっても縮瞳しない（対光反応がない）などはヘルペス性の炎症により起こります。	縮小	副交感神経によって瞳孔括約筋は支配され、瞳孔が縮瞳します。瞳孔は黒目の中央にある円形の穴で、虹彩（こうさい）といわれます。瞳孔は暗所では散瞳し、明所では縮瞳することで、眼の中に入る光の量を調節しています。また近くを見る時も縮瞳しピントが合いやすくなります。これを専門用語で輻湊（ふくそう）といいます。瞳孔不同には、ホルネル症候群、瞳孔緊張症、動眼神経麻痺（まひ）などがあります。
唾液	減少、濃くなる	唾液が少なくなり口が乾くシェーグレン症候群はヘルペスによるものです。	増加、薄くなる	
気管支	拡張	息が出しにくくなります。	収縮	喘息になりやすくなります。
心拍	増加	動悸や不整脈がみられ	減少	脈が遅くなる徐脈が

		ます。		みられます。
骨格筋	緊張	肩こりや首こりがみられ、筋肉が硬くなります。こむら返りが起こりやすくなります。	弛緩	手に力が入りにくくなります。
血圧	上昇	突然に血圧が上昇するのはヘルペスのためです。	下降	血圧が突然に低くなります。
胃腸の働き	抑制	消化不良が起こります。便秘が起こりやすくなります。	促進	下痢が起こりやすくなります。過敏性腸症候群になります。
消化液	抑制	消化不良が起こります。	促進	胃酸が出過ぎます。
血管	収縮	血圧が上がります。脳の血管神経が炎症を起こすと頭痛が起こります。血管神経炎の頭痛は、実は収縮した後、拡張するときにブラジキニンなどの発痛物質が出て頭痛が生じます。	拡張	拡張しすぎると、血圧が低下しすぎることがあります。収縮しすぎた血管が拡張するときに偏頭痛が起こりやすくなるのはブラジキニンのためです。
呼吸	早くなる	過呼吸になります。	ゆっくりになる	遅くなっても休めば死ぬことはありません。アッハッハ！
発汗	増加	汗かき、寝汗がみられます。	減少	汗がかきにくくなります。
体温	増加	体温が高めになります。	減少	冷え性になります。

それでは、交感神経と副交感神経の両方にヘルペスが感染し、同時に免疫との戦いが交感神経と副交感神経で生じたらどうなるのでしょうか？ひとつは昔から言われている自律神経失調症のような様々な症状が出てきます。交感神経における炎症の度合いが高ければ、上にあげた交感神経炎の症状が強くなり、副交感神経における炎症の度合いが高ければ、上にあげた副交感神経炎の症状が強くなるのです。その上に、どの自律神経で戦うかの組み合わせによって様々な症状が出てくるものですから、結局は原因不明の病気となるのです。

ちなみに、交感神経の命令が臓器に伝わるために必要な神経伝達物質はアドレナリンか

ノルアドレナリンであります。副交感神経が臓器に伝わるために必要な神経伝達物質はアセチルコリンであります。

医学が最高度に発達した現代においては死をもたらす病原体が原因となる病気はなくなったにもかかわらず、ステロイドを使えば使うほど、ヘルペスが無限に増えていくということを、世界中の医学者の誰一人としてステロイドの副作用の最も大きな副作用だと気付いていないのです。このようなヘルペスの戦いも原因不明の難病として病名がつけられ、治療もステロイド投与ということになり、一挙にヘルペス性神経炎の症状も戦いがなくなるので消えてしまうのです。しかもその間、ヘルペスはさらに増え続けているのです。人類が消滅するまでヘルペスとイタチごっこの戦いと間違った治療が続けられるのです。悲しいことです。